保護者会が創る観劇会

永野むつみ

あやうい観劇会

運動会が終わると、いよいよ観劇会のシーズンがやって来る。私たち人形劇団にとって一番忙しい季節となる。ここ数年、幼稚園、保育園の観劇会は、公立、私立を問わず、保護者会主催で実現することが多い。年一回の観劇が、園の予算の中で確保できないのはなぜだろう。幼児の発達にとって必要不可欠なものと認知されていないということか。それが〝いまだに〟なのか〝いまでは〟なのか分からないが、日本はやはり貧しい国なのだと思う。子どもは国の宝、国の未来ではないのか。保護者負担は、税金の二度払いではないのかと、私自身、一親としても腹が立つ。

「針を持つのはトゲを抜くときだけ。だからなにか手作りの物を作らなけりゃならないバザーは嫌い」という〝豪傑〟もいたりして、バザーを苦手とする保護者が増えているとも聞く。ともあれ、年一回の

観劇会は、保護者と先生方によるバザーなどの涙ぐましい努力によって、かろうじて支えられている。

折角なのに

観劇後、保護者会の図らいで交流会を兼ねた昼食会がもたれることがある。人形劇仲間の中には、昔のサーカスのように、風のごとく立ち去ってこそ劇団と、こうした事後の交流を嫌う者もいる。しかし私は、若いお母さん方とじかに触れ合える貴重な時間ととらえ、楽しむことにしている。しかし、いつの頃からか、そうした会が少々様変わりしているような気がする。これでは交流会と言えるのかなあなどと気をもむときがある。たとえば車座になっているのにみんなで食事をしている感じがしない。みんなでおしゃべりを楽しむという奮囲気とは少し違う気がしてならない。一言で言えば全体を進行する人がいないようだ。見渡すと、隣同士、あるいは二、三人ずつでなにか話している。ときに笑い声も上がる。聞くともなしに聞いていると髪型や洋服の話。やせた、あるいは太った話。夫のことやその他色々。つまり近況報告。いわゆる世間話。それはそれで楽し気なので、これでいいのかなと思わないでもない。しかし一方で持ち前のお節介心が顔を出す。二、三人で話すのは後で、私たちが居ないときにするのはどうかしら。どうせなら、その話をみんなに聞こえるように言うのはどう？　話題は何でもいい。折角の機会なんだからみんなで話そうよ。そんな言葉がのど元まで出かかる。もしかすると、日本人特有の恥じらいと、照れ、遠慮のなせる技。そう大げさに考えることはないのかも知れないと思い直す。

黙って聞こうよ

「年に何回ぐらい観劇会をやるんですか」

「昨年はどんな取組みを?」

「どうして私たちを選んでくださったのですか」

などなど、こちらから質問する。全体へ投げかけるように（本当は、私たちの人形劇を気に入ってもらえたかどうかを尋ねたいところだが、それはこらえる。おっしゃりたかったらむこうからなにか言ってくださるだろう）。すると、話し声は止み、いっとき視線も集まるのだが、保護者の一人が応え始めると再び視線はばらけ、それぞれの話に戻ってしまう。私の質問が注目を集めたのは、ただただ声が大きいせいなのか。私たちに興味はないのか。その程度の人形劇だったということなのかと、上演直後の柔らかな心は傷つき易くもあり、少々ひがみっぽい。そうして、私とその方のやりとりも、二、三人ずつの、他の小集団の世間話の一つのようにまぎれていく。

確かに、その方の話しぶりも、質問者の私ひとりに、個人的に答えているように聞こえる。声も小さい。大勢の前で話すことに慣れていないのだろう。それならば余計に、ちょっとみんな黙って聞いたらどうなのと言いたい。率直に言って、仲間の話をみんなで聞こうという姿勢が弱いようにみうけられる。会をみんなで盛りたてていこうという風が希薄な気がするのだ。何を目的とした集まりなのかを忘れているのでは!? とやはり思う。

そう言えば息子の中学校の保護者会に参加したときも同様の印象をもった。教師が話しているときは聞いているのに保護者が発言するとざわつく。ある日の授業参観のときなどは「授業中の保護者の私語を禁じます」と事前に申し渡されたことさえあった。近頃の子どもはがまんが足りないと言われるが

▲「ばばばあちゃんのいそがしい夜」を観る子どもたち
（保護者はこの角度から観ることになる）

母親たちも大差ない。

「今日の人形劇はお母さん方も〝つきそい〟ではなく、ご自分も一観客としてお楽しみください」

とクギをさしておかないと上演中でさえおしゃべりし続ける方もいる。

心を開いて

聞きたいことだけ聞きたい。話したいときに話したい。辛抱がないとも言えるが、その時々の自分の興味、関心に正直なだけなのだろう。他意はない。だから話題が自分の関心のある方向へ向かい始めると、その会話に加わる。情報の取捨選択。問題は、何を捨て何を拾うかということ。他意がない分、一番先に捨てるのが仲間の話だとするとやはりひっかかる。仲間の話には聞くべきものがないというのだろうか。近頃の講演会ブームと相まって、これでいいのかと心配になる。〝ためになる〟〝役に立つ〟情

報を求めるあまり、間口を狭くしてはいないか、急ぎすぎてはいないか。自分が今すぐには興味がもてない事柄であっても、耳と心を開いて聞き置くくらいのゆとりがあってもいいのではないかと言いたい。

保護者会主催の取組みは、観劇会にしても講演会なども、自分が保護者会の構成員であり基本的に決定権をもつと言っても自分の意思だけでは決めてはいない。企画も運営もどなたかにゆだねて、自分はただの一参加者になるという場合が圧倒的に多い。だからしばしば、これは自分では選ばないな、というのにも出くわす。確かに〝ハズレ〟もある。だが、集団で取り組むおもしろさは同時にこのズレにある。無理矢理、自分の興味、関心を押し広げられる。このことも楽しめるはずだ。

みんなで話す楽しさをぜひ

いつもの仲良しだけではなくて、もう少し大きな集団で話すことのおもしろさは、話が思いがけない方向にふくらんでいくことにある。とりたててなにか「決定」する必要のない話、言いっぱなしで構わない話は特におもしろい。観劇後の感想の言い合いなどはまさにそのひとつだ。三十人いれば三十通りの見方があるということを実感する。同じものを見たのにね、と改めておどろく。言いたいことを言い合いながら、ああこの人はこういう人でもあったのだと発見しあう。血液型や星座占いなどよりもっとその人のその人らしさ、その人自身が浮かび上ってくる。観劇を重ねることが、集団の相互理解をもっと深めるような事後の交流も可能なのだ。一見、劇の話をしながら、それぞれが自分の考え方や子育てについて振り返る場ともなる展開もありうると、やはり言いたい。そのためにも、安心して感じたままを言い合える場となるように会は運営されなくてはならないと思う。

利口よりも聡明を

実は、今では「無口です」と言えば「口が六つあるのですね」と言われる私だが、十八歳の上京したての頃は、言葉より涙が先に出てしまう口べたな娘であった。自分に山形なまりがあるのに気づいていず、何を言っても聞き返されることに合点がいかず、そして恥ずかしく、自信を喪失していた。しかし大学のサークルの仲間たちが「一度言って分かってもらえないと思ったら二度。それでもダメなら三度言えばいい」と辛抱強く私の話に耳を傾けてくれた。当時は学生運動が盛んになり始めた頃で、田舎育ちの私にとっては、山形なまりのせいだけではなく、話のテンポも問題意識も到底ついていけるものではなかった。その仲間たちとの出合いがなければ今の私はない。言葉が通じないせつなさと、ていねいに聞いてもらえる喜びとを体験した。そして、どんなに口べたな者がいても、聞く側に聞く耳があればコミュニケーションは成り立つのだと私はそこで学んだ。表現教育というとともすると表出の方のみが強調されるが、受け手の聞く姿勢、聞く耳を育てるということも、もっと考えられていい。根底にあるのは他者への関心。観劇は、結果としてこの聞く力、受けとめる力と、人間への興味を育てる。子どもだけではなくてぜひ保護者にも観劇会ならではの楽しさを味わいつくして欲しい。そのときでなければ！　という楽しみにもっと貪欲であっていい。折角の保護者会主催の観劇会なのだから。

（人形劇団ひぽぽたあむ）